

JAF AE Newsletter



No. 26 (October 2008)

第5回スタディ・ツアー：ウラジオストク編



日本「アジア英語」学会のユニークな活動のひとつは、海外へのスタディ・ツアーです。これまで、第1回：インド、第2回：フィリピン、第3回：台湾、第4回：タイ、と海外へのスタディ・ツアーを重ねてきましたが、今年6月には第5回目のツアーが行われました。行き先はロシア・ウラジオストクで、9名の参加者がありました。「ロシアはアジアか？」という声が聞こえるかもしれませんが、すでに「極東ロシアはアジアである」という定義のもと、文科省の委嘱事業にも複数の学会員が携わり研究が進められています。また、地図を開いて見てみるとウラジオストクは朝鮮半島より東に位置し、地理的に見ても充分アジア圏と言えるでしょう。

この度、極東ロシア・ウラジオストクに我が学会メンバーが出かけ、学術交流を深めてきたことは本学会にとっても歴史的なイベントであり、日本の英語系学界にとってもフロンティア的第一歩と言えるのではないのでしょうか。すでに、ツアーの全体的な報告は、前号のニュースレターで橋内武先生により報告されていますが、今号では参加者からの声をお届けしたいと思います。

ロシア・ウラジオストクの英語諸事情

臼井芳子（獨協大学）

今年度の JAF AE 海外研修は、第14回ロシア英語教師協会大会（NATE）・第7回極東英語教師協会大会（FEELTA）へ参加するという目的で、ロシアのウラジオストクで行われた。実質2日という短い滞在ではあったが、この訪問を通じて考察した「ロシア・ウラジオストクにおける英語諸事情」について報告する。

まず、イギリス英語（以後英語）・アメリカ英語（以後米語）のどちらを教えるべきなのか議論されていた。英語が「最も標準的」で、米語が「最も実用的」だと捉えられているようだった。また、今年1月在露米大使館が実施した「英語・米語のどちらがより将来学生の役に立つと思っているか」という意識調査でも、大学教員の43%が米語、39%が英語を選択していることから米語支持者の増加傾向がみてとれる。現に、米国大使館の English Language Office が NATE や FEELTA 等の学会や教員養成大学（pedagogical university）等と提携し、教員養成や英語教育カリキュラムと密に関わっている。

次に、中国英語（China English）の研究が盛んであった。中国英語は Chinese English や Chinglish と区別され、中国国内での英語使用が普及するにつれ、中国文化を伝達し、中国の文化価値とアイデンティティを表象、そして中国の社会通念を具体化する機能を果たすコトバとして確立しつつあるという。まだ中国国内でも「中国英語」の是非は問われているようだが、中国人と英語で頻繁にコミュニケーションをとる必要のあるロシア人通訳者やビジネスパーソンは「中国英語」の特

徴を理解することを重要視しているということだった。

同じ EFL 環境の国として、様々な視点から学べることもありそうだった。



だるま贈呈

JAF AE より FEELTA への友情の証

白露の言語景観に思う

齋藤智恵（国際医療福祉大学）

6月29日、タクシーをとばして新潟空港に到着した。空港内に入ると、日本語、中国語（簡体字と繁体字）、韓国語、そしてロシア語の表記があり、日本とロシアの地理的な近さを感じる。飛行機に乗り込んで離陸したかと思うと、2時間足らずでウラジオストク空港に着陸した。あらためてその近さに驚く。

学会の運営方法、街の様子、ホテルのサービス、ウラジオストクでの数日間は驚きの連続で、日本との違いをあげたら切りがない。無秩序と整備された現代社会が混在していると表現すればいいのだろうか。

NATE@FEELTA の学会では日本の言語景観について発表させていただいた。ウラジオストクの街の中を歩きながらも、目は自然とロシア語以外の看板を探している。驚くほどに外国語表示が少ない。日本語表示はないだろうと予想はしていたが、英語表示もブランド名くらいでないに等しい。逆に、日本の言語景観にいかにか大量の外国語が入り込んでいるかを思い知る。

最後に、今回の海外研修で出会った魅力ある人々について触れたいと思う。現地の英

語教員や学生には、本当に親切にさせていただいた。そして、この研修までは、私が一方的に存じ上げているだけでお話をさせていただく機会のなかった先生方を含め、全てのメンバーから非常に多くのことを学ばせていただいた。この場をお借りして心からお礼を申し上げます。



やっと見つけた寿司屋の日本語の看板



日本の化粧品を扱うお店の看板

若い女性の店員がたくさんおり、店内はとても明るくきれい（日本のイメージがそうなのだろうか）。空港まで迎えに来たバスに添乗してくれた女子大学生の最初の質問は“Do you know Megumi?”だった。

From Russia with Love

Beverley LAFAYE

Tokai Gakuen University

The end of the line of the trans-Siberian railway, Vladivostok, a far outpost of the Russian Federation, is 5 hours from Moscow by plane with as many time zones between,

and perhaps seven days by train; this is not a city you just happen upon. Closed until 1992 home as it was, to the navy fleet, it was forbidden to Russians without a special permit, let alone foreigners. But the town now feels as if it were chafing at the bit to develop. The commercial port is booming, and everywhere cranes stretch out; not one of them in flight.

Here is a city where the native speaker of English, handicapped by a lack of even the most rudimentary Russian, is reduced to gestures. Outside the secure environment of the Far Eastern National University, with its dozens of eager-to-serve, fluent English language speaking students, there are few places here where you can brag that English is the Lingua Franca and you can always get by if you speak it.

Arriving at the conference late, we missed some of the academic program but it was good to find out what the Americans are doing in Russia, through David Fay, English Language Officer at the US Embassy in Moscow, to meet a American teacher trainer from Siberia and catch up with Zoya Proshina from the host university, met at several conferences already and sharing some of my research interests in discourse analysis and loanwords. Interestingly enough, one of the most popular speakers at the conference judging by the numbers trying to pile into his lecture like so many Tokyo subway riders, was Tim Murphey. We needed to go to Russia to hear him, though he works here in Japan. His empathy with students and flair for engaging the weak and strong in their language-learning experience puts Tim head and shoulders above many of his peers.

I missed some of the best-known speakers but am glad I didn't miss some of the most exciting parts of the social program, including the final dinner where we learned

that Russians spontaneously break into dance whenever given the chance, and that their hospitality is warm-hearted and frank. This passionate approach to life was again shown us during the highlight of my trip, the visit to the orthodox church.

Here we were treated not only to an explanation of Russian orthodoxy and its ups and downs, but to a round of songs sung a cap-pella - 2 haunting voices which filled the church and made us think there were 100 voices singing), and to bell-ringing in the belfry, where Hashiuchi-sensei showed us that he has rhythm as well as the panache we already knew about.

In comparison with the huge distances many of the participants had to cover to attend this small, but enriching, conference, our 2-hour journey from Japan was a mere hop, skip and a jump. A most enjoyable 3-day trip. Special thanks to Yuko Takeshita and Stephen Ryan for making it possible for our JAF AE group.

ロシア式卒業式

橋内武（桃山学院大学）

極東国立大学は、小生の勤務校（桃山学院大学）の提携校である。そのため、訪問大学の国際交流課の方に連絡をとると、卒業式への誘いを受けた。またとない機会だから、厚かましくも出席させてもらったが、興味深い事実が6点観察された。

1. まずは、学長による祝辞が述べられる。（これは普遍的であろう）
2. 一人ずつ学位記・卒業証書が学部長より渡される。（これは欧米では一般的）
3. ある学部の学位授与が行われる。その折に卒業生は一人ずつ壇上に向かって、学位記・卒業証書を受け取る。
4. その後、何らかの演目によるパフォーマンス（例えば、器楽演奏・舞踊・歌唱のいずれか）が入る。
5. そのパフォーマンスが終わると、次の学

部の学位記授与が行われ、その後前とは別のパフォーマンスが披露される。というようなサイクルで進んでいく。つまり、硬い儀式と軟らかい娯楽が交互に繰り返されながら進行する。（私には新鮮であった）

6. 学生の服装は自由であるが、ややフォーマルなもの（男性はスーツ、女性はドレスが多い）を着ていた。アカデミックガウンを着るわけではない。

小生が何よりも驚いたのは上記の 4 である。だから、とても楽しい式典である。所変われば、式も変わるということである。



最終日に参加者全員で記念撮影

JAF AE のホームページにスタディ・ツアーの写真がアップされています。是非ともご覧ください。

国立療養所菊池恵楓園入所者と英語(2)

岡村 徹（帝塚山学院大学）

今回は、ハンセン病患者への差別が厳しかった頃に、療養所内で防護服なしで英語を教えた杉村春三先生の話を紹介した。今回は、今日の日本の英語教育を支えている教師に何ができるか、日本「アジア英語」学会が貢献できることは何かについて私見を述べたい。

杉村氏が菊池恵楓園で入所者のために英語を教えたという事実は、入所者への聞き取りをすることで知るに至ったが、社会福祉の文献においても、例えば「杉村はボランティアとして青年入所者の夜学を開いて英語を教えるなど、しばしば恵楓園を訪れていた。」

（第十二 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任（1） p. 357 www.mhlw.go.jp/topics/bukyoku/kenkou/hansen/kanren/dl/4a22d.pdf）という記述を見つづけることができる。杉村夫妻はすでに他界しているが、東京で医師をしているご長男（杉村純氏）が健在なので、上記以外の話も聞くことができた。ご長男の杉村純氏は、「病者が社会復帰し『社会存在』としての幸福を回復することを最終目標としていたと読みとれます。」（前号書、584 頁）と述べているように、杉村氏は、患者の社会復帰に向けて真剣に取り組んだ学者であると思われる。また、夫人の杉村よしこも「恵楓園の若い方々の社会復帰に備え夜学校を創りました。」（前号書、576 頁）と回想している。

杉村春三は、患者が将来社会復帰するのに英語を知っていたら、きっと役に立つと信じほぼ毎日英語を教えるために恵楓園を訪れた。進駐軍が来園した時は、氏がアメリカ人と応対し機関銃のような速さで英語を操っていたという。進駐軍もハンセン病を恐れていたようであるが、杉村氏が熱心に説明をした姿が目につかふ。

恵楓園の入所者への教育は良い入所者を育成するためであった。つまり園内から脱走しない、園内でもめ事を起こさないよう努めるための教育であって人間として自身を高めていくような教育ではなかった。その教育のあり方は明らかに国際的な動向から逸脱するものであった。しかし、杉村氏は違った。彼の姿勢は当時においては異端児扱いされたとは言え、模範的なものであり、21 世紀の人権を考えるうえできわめて示唆的である。

人権という点では、私たち日本人は過去に大きな過ちを犯している。次の歴史的な事実は、杉村氏も著書で触れているが今日忘れ去られようとしている。

Thirty-nine lepers were on Nauru when the Japanese occupied the island in August 1942. They received no treatment from the Japanese, who about a year later herded them into a barge which was towed out to

sea and, according to reports, was then destroyed by gunfire. No trace has been found of any survivors.

Mark Ridgway in H. W. Wade and V. Ledowsky, *The Leprosy Epidemic at Nauru; A Review with date on the Status since 1937, International Journal of Leprosy, Vol. 20, No. 1, 1952, pp. 1-29.*

旧日本兵の健康や衛生を保つために、40 名近い島民の命が奪われたのである。

氏は早くから、患者のための福祉や教育の在り方について改善するための方策や構想を持っていた稀有な存在であった。杉村氏の福祉観は、今日においても通じるものであり、現代を生きる私たち一人一人が自分たちの問題として捉えていかなければならないと考える。

英語を教える我々にとっても、学ぶべき点が多い。英語を通じて、日本「アジア英語」学会の会員が貢献できることも多々ある。企業も学校も地域社会への貢献が必須事項になっている今日、一般社会から過去に隔離された経験を持つ集団を接続した形の社会貢献が議論されなければならないと考える。ボランティアとして英語を教えるなら今すぐにでもできる。外国の文化に飢えている人も多だろう。また、学会として英語圏におけるハンセン病問題を調査し、それを国内の関係者に伝えることも重要だ。前号で取り上げたりデルライトは熊本の本妙寺で物乞いをしていたハンセン病患者に衝撃を受け、以来すべての人生を患者のために捧げた英国人女性である。ハンセン病に有効なプロミンは米国カーヴィル療養所のファジェイ博士によって1943年に確認された。これは「カーヴィルの奇跡」といわれた。

アジア地域としては、インド、フィリピン、韓国、中国などが今日でも深刻な問題を抱えている。学会が果たす役割は無限にある。私自身は今年度中にナウル共和国に行き、第二次大戦下におけるハンセン病患者虐殺事件について島民がどのようにそのことを認知しているのか、また今日でも偏見があるのかを調

査してくるつもりである。

入所者は一刻も早く園から出て社会復帰すべきという考えもあろう。ところが、入所者の中には、受け皿のない社会にいきなり放り出されても困る、そっとしておいて欲しいと考える人もいるのである。入所者の多くは高齢者（平均年齢が80才近い）である。生活は保証されているが、社会に出るといことはとても勇気がいることである。

入所者は、外部世界に目を向ける意識が非常に強い。ハンセン病文学や機関紙『菊池野』はその典型例である。療養所は宝の山である。学術的な意味においても、過去の歴史的遺産を語り継ぐという意味においても重要である。地域社会とうまく融合した形での存続を望む入所者は少なくない。

現在、恵楓園の軽症者・不自由者の総数は438名（『菊池野』2008年1月号8頁）である。園内にある納骨堂には、約1200柱の遺骨が安置されている。政府には、故郷の文化を剥奪された人びとの声をきっちり受け止めながら政策を考えていってほしい。

新 刊 書 籍 紹 介



*Nikkei Brazilians at a
Brazilian School in Japan*

Toshiko SUGINO

慶應義塾大学出版会
(6,000円+税)

紹介者：河原俊昭（京都
光華女子大学）

1990年に入管法の改正以来、日本に住む日系ブラジル人の数は大幅に増え、各地で注目を浴びつつある。筆者は故郷である浜松のブラジル人学校を訪問し、授業観察、関係者へのインタビュー、アンケートを行い、その結果を報告している。日系ブラジル人の子どもたちの直面するアイデンティティクライシス、母語保持教育と日本語学習の問題点などが、色んな角度から論じられており興味深い

内容となっている。また、明快で分かりやすい英文で書かれている点もこの本の魅力となっている。

□座番号：00280-8-3239 です。
(会計・会員管理担当・樋口謙一郎)

事務局からのお知らせ

1) 研究助成プログラムへの申請募集

2009 年度に支給する研究助成プログラムへの申請を 12 月 1 日より 12 月 20 日に受け付けます。選考委員会による申請書類の審査を経て、理事会が助成対象者を決定し、2009 年 2 月 28 日までに応募者に対して選考結果を文書で通知する予定です。助成総額は 10 万円です。応募資格、応募要領の詳細は、学会 HP をご参照ください。

2) 第25回全国大会(2009年)について

第 25 回全国大会は、2009 年 9 月 18, 19, 20 日、熊本学園大学で開催される IAICS に組み込み、最終日 20 日を特に JAF AE デーといたします。IAICS 3 日間の参加をご希望のかたの申し込みは、IAICS ホームページより所定の手続きを経て行っていただきますが、20 日のみの参加をご希望のかたは、通常の JAF AE への参加と変わりません。20 日には基調講演、研究発表、会員総会、懇親会を予定しております。総会を除き、IAICS と合同で行いますのでご了承ください。なお、IAICS のホームページも合わせてご覧ください。

<<http://www.uri.edu/iaics/index.php>>

会計・会員管理担当より

1) 第 23 回全国大会にあわせて会員名簿を更新いたしました。現在、住所不明となっている会員は次の通りです。

ト剣鋒 Renu Gupta 後藤いく子

異動・転居などで連絡先の変更が生じた場合には、事務局までお知らせいただければ幸いです。

2) 今年度の会費を納めていない方は納入方お願い致します。会費は、一般会員 5,000 円、学生会員 3,000 円。郵便振込先は、

加入者名：日本「アジア英語」学会

ニューズレター編集担当より

JAF AE ニューズレター 27 号は 1 月中旬発行予定です。会員の皆様から記事を募集致します。国内外の紀行文、書籍紹介、海外おもしろ情報など「アジア」「英語」「言語」周辺をキーワードに、800~1,200 字程度で奮って投稿下さい。画像なども是非ご投稿ください。投稿をお考えの方は、11 月末までに編集担当(相川)までお知らせください。アドレスは aikawa@nnc.or.jp です。

【編集後記】今回は編集のアクションが遅れ、どうなることかと思いましたが、皆様方のご協力により、完成することができました。この場を借りて御礼申し上げます。12 月の青山学院大学での大会で皆様にお会いできることを楽しみにしております。

2008 年 10 月 15 日発行

編集・発行 日本「アジア英語」学会

代表者 本名信行

編集長 相川真佐夫

印刷 (有) すすき印刷

事務局

〒226-0015

神奈川県横浜市緑区三保町 32

東洋英和女学院大学国際社会学部

竹下裕子研究室内

Fax: 045-922-6642

E-mail: jafae@live.jp

学会ホームページ:

<http://www.jafae.org>

年会費振込先：郵便振替 00280-8-3239

<< JAF AE Secretariat >>

Prof. Yuko Takeshita

Faculty of Social Sciences

Toyo Eiwa University

32 Miho-cho, Midori-ku, Yokohama-shi,

Kanagawa 226-0015 JAPAN

FAX: +81-45-922-6642

E-mail: jafae@live.jp

JAF AE's homepage:

<http://www.jafae.org>

JAF AE's postal transfer account number:

00280-8-3239